

## 25. 全国山・鉾・屋台保存連合会

5月30・31日桑名市で開催された、表題団体の総会に出席した時の感想を述べる。この連合会は山・鉾・屋台行事を行う中で国指定重要文化財になっている祭の全国ネットワーク組織であり、山・鉾・屋台行事とは祭の一形態である。

古代、われわれの祖先は死ぬと山へ葬られた。山は先祖の霊が神となり存在する所であった。祭礼を行う時、その先祖神をお迎えする目印となるのが山・鉾・屋台の類である。天皇家大嘗会で登場する標山<sup>しるしやま</sup>が原型と言われているが、もともとは山そのものに似せて動かない置き山から担ぎ山となり、更に輪をつけて曳山と発達した。山・鉾と屋台の違いは、山・鉾は屋根がなく最上階に神が降臨するが、屋台は屋根付きで中で催し物をすると言われているが、厳密なものではない。だんじり、祭車<sup>さいしゃ</sup>、御車<sup>おくるま</sup>、笠鉾<sup>かさぼこ</sup>等々所によって呼称はまちまちであるが、要するに神の依り代である。

そういった曳山系の祭で、国指定33か所の祭保存会が祭日に合わせて1年1度の総会と、祭に付随する伝統技術の研修会を開催する。わが国には20万以上ともいわれる宗教行事に基づく祭礼が存するが、巨大な曳山系に限ってやや特別扱いだ。それは曳山にまつわる諸々の文化・技術（織物・彫刻・塗・木工・からくり人形・絵画あるいは祭囃子の道具等々）が付随するからだ。いわば有形である美術・工芸品には公的な財政支援や基準を設けて権威付けがしやすいという理由から組織を作り多少囲い込む傾向が生ずる。

この日集まった33の祭は、ユネスコの無形文化遺産候補になり更なる権威付けを目指す為、今年の総会は大いに盛り上がった。来賓で来た文化庁はじめ研修会の講師たちも、伝統技術の継承を中心の話ばかりであったが、祭が潜在的にもつソフトパワー、すなわち生活共同体の絆であるふるさとづくり・まちづくりの効用をもっと自覚すべきである。

ところで、総会の開催地桑名の石取祭は真夏8月第1土・日に行われる春日神社の例祭であるが、伊勢神宮のお木曳行事に合わせて連盟の総会を誘致したものであったので、全国の祭関係者はこのお木曳行事にも参加した。桑名におけるお木曳とは伊勢神宮の式年遷宮後、宇治橋の鳥居を桑名の七里の渡し（かつて東海道は尾張熱田から伊勢桑名まで7里は海路であった）にある伊勢国一の鳥居へ持ってきて建て替えるための巨大な檜を大勢で曳いていく行事である。

ここで、伊勢神宮の式年遷宮について一言述べるが、20年に一度すべてのものを作り替え再生させるというこの循環の思想は日本人の信仰心と結びつき、Sustainable（持続可能）というユネスコの目指す人類普遍の価値観と一致すると思う。

伊勢神宮式年遷宮にまつわる鳥居の建て替え行事と全国祭の研修会を重ねることは意義のある企画であった。